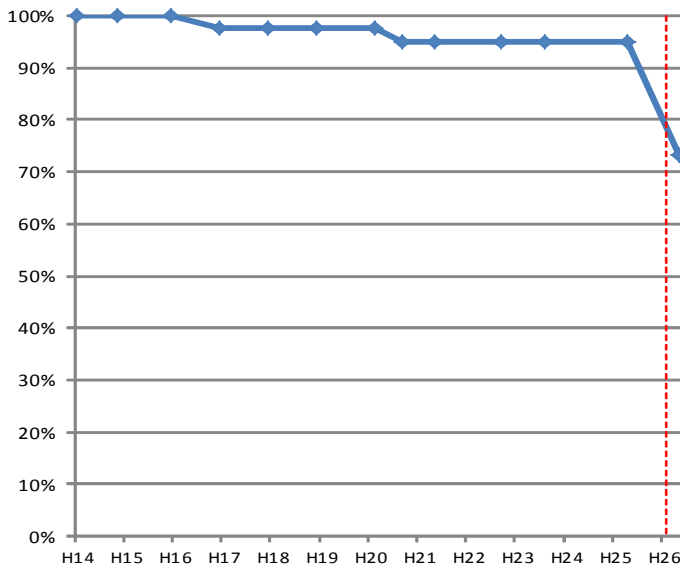


| | | |
|---------|--|--|
| 樹種名 | ヤブツバキ |  |
| 科 目 | ツバキ科 | |
| 学 名 | <i>Camellia japonica</i> | |
| 分 布 | 本州、四国、九州、南西諸島から、国外では朝鮮半島南部と台湾に分布。 本州中部にはごく近縁のユキツバキがあるが、ツバキは海岸沿いに青森県まで分布し、ユキツバキはより内陸標高の高い位置にあって住み分ける。 | |
| 樹木特性 | 陰樹であり、山地の照葉樹林に生息する。比較的日当たりの良い場所を好み、尾根沿いに発達した林や二次林などの低い林に多い。暗い環境では成長することから耐陰性は高い。生育環境が良好な場合には、寿命は最大樹齢が 100 年以上と推定され、埋土種子は無い。 | |
| 用 途 | 公園樹、器具・彫刻材、盆栽としても利用。(印材や将棋の駒) | |
| 植栽本数 | 150 本 (他樹種との混植) | |
| 特 徴 | <p>【樹 形】 ツバキの野生種をヤブツバキといい、常緑小高木。普通は高さ 5~6m だが、樹高 18m・胸高直径 50cm にも達する例もある。ただし、その成長は遅く、寿命は長い。 樹皮はなめらかで灰白色、時に細かな突起がまばらに出る。 枝はよくわかれ、冬芽は線状楕円形で先端はとがり、円頭の鱗片が折り重なる。鱗片の外側には細かい伏せた毛がある。鱗片は枝が伸びると脱落する。 葉は互生、長楕円形から広楕円形、鋭尖頭（先端が突き出す）で葉脚は広くさび形、縁には鋸歯が並ぶ。葉質は厚くて表面につやがあり、濃緑色で裏面はやや色が薄い。 木質は固く緻密、かつ均質で木目は余り目立たない、摩耗に強くて摩り減らない等の特徴から工芸品、細工もの等に用いられる。</p> |    |
| 試験地での様子 | ポット苗を植栽し、病虫獣害も特に見られず現存率も 73%と高い。成長量は大きくはないが順調に生育している。 | |
| 被 害 | 鹿による幹の剥皮害を受けやすいとされているが、当試験地では被害は見られない。 | |

ヤブツバキ 現存率



【現存率】

枯死は少ない。

平成 26 年度に、毎木調査を実施した結果の現存率は 73.3%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

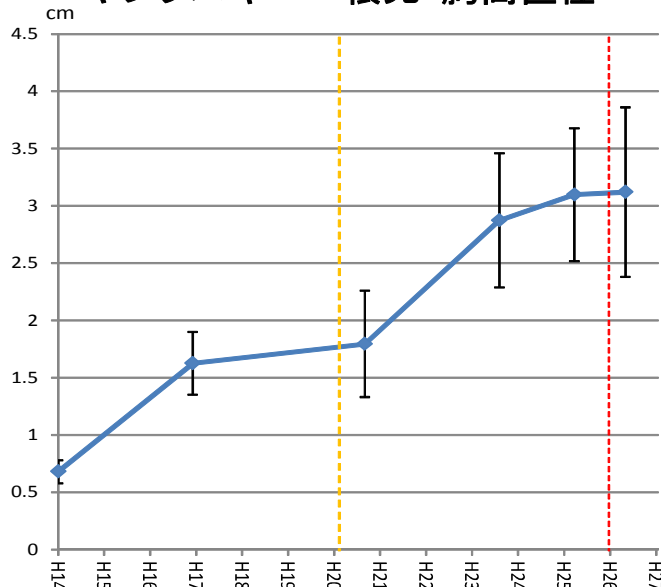
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 3.11 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ヤブツバキ 根元・胸高直径



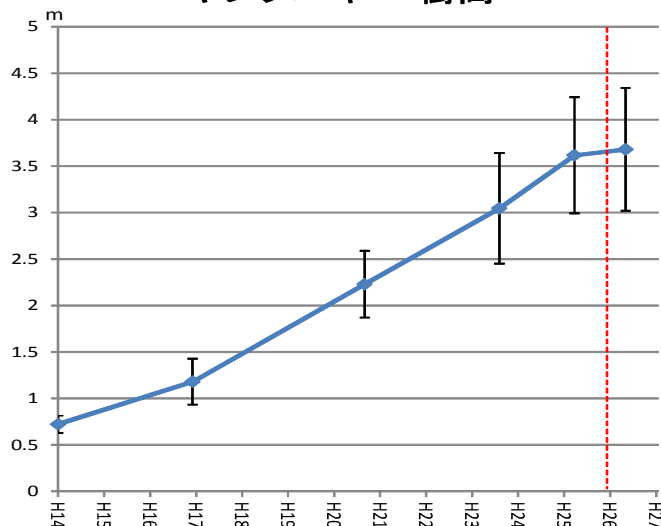
【樹 高】

順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 3.68m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ヤブツバキ 樹高



《プチ情報》

ツバキの花は古来から日本人に愛され、京都の龍安寺には室町時代のツバキが残っている。他家受粉で結実するために変種が生じやすいことから、古くから品種改良が行われてきた。江戸時代には將軍家や肥後、加賀藩などの大名、京都の公家の他、庶民の間でも大いに流行し、たくさんの品種が作られた。日本酒の醸造には木灰が必要で、ツバキの木灰が最高とされている。また、アルミニウムを多く含むことから古くは染色用にも用いられた。

ツバキの花は花卉が個々に散るのではなく、多くは花卉が基部でつながっていて萼を残して丸ごと落ちる。それが首が落ちる様子を連想させるために入院している人間などのお見舞いに持つていくことはタブーとされている。この様は古来より落椿とも表現され、俳句においては春の季語である。

| | | |
|-------------------|---|--|
| 樹種名 | ヤブニッケイ |  |
| 科目 | クスノキ科 | |
| 学名 | <i>Cinnamomum tenuifolium</i> | |
| 分布 | 福島県以南の本州、四国、九州、沖縄、国外では朝鮮半島、中国に分布する。 | |
| 樹木特性 | 温暖な森林に生育し、東アジアの暖温帯に分布している。暖地の二次林には良く見られる種であり、時としてクスノキやシロダモの芽生えと区別しにくい場合がある。 | |
| 用途 | 庭木、材は建築・家具・器具材として使われる。 種子からは香油を取ることができる。また葉、根皮などに香気があるがニッケイよりは劣る。 |  |
| 植栽本数/面積 (植栽密度) | 11本/0.004ha (3,000本/ha) | |
| 特徴 | <p>【樹形】 常緑高木であり、高さ 10m ほどになるが、高木層を形成するほどには高くない。樹皮は灰黒色で滑らか。</p> <p>葉はほぼ対生につくが、ややずれていたり、互生に見えるものもあり、亜対生と言われる。葉身は楕円形で艶が強く、さほど厚くはないが、両面無毛で革質でゴワゴワしており、波打っていることが多い。深緑色で、表面にはつやが強く、はっきりとした三行脈が白っぽく透けて見える。葉の形等に変異が多く、分類は複雑である。ヤブニッケイとは言え、クスノキの仲間の特徴で、葉は揉むと芳香がある。</p> <p>花期は 6~7 月に、本年枝の葉腋から、長柄のある散形花序を出す。1 つの花序に 5~13 枚の花を咲かせ、花弁は 6 枚、雄しべは 12 個。</p> <p>堅実は楕円形で、12 月に黒く熟す。</p> | |
| 試験地での様子 | ポット苗を植栽し、11本が現存している。 |  |
| 被害 | 特になし | |

【現存率】

平成 26 年に毎木調査をした結果、11 本が現存している。

【根元・胸高直径】

平成 26 年に毎木調査をした結果、平均胸高直径は 1.65 cm であり、成長スピードは遅い。

【樹 高】

平成 26 年に毎木調査をした結果、樹高は 2.03m であり、上長成長スピードは遅い。

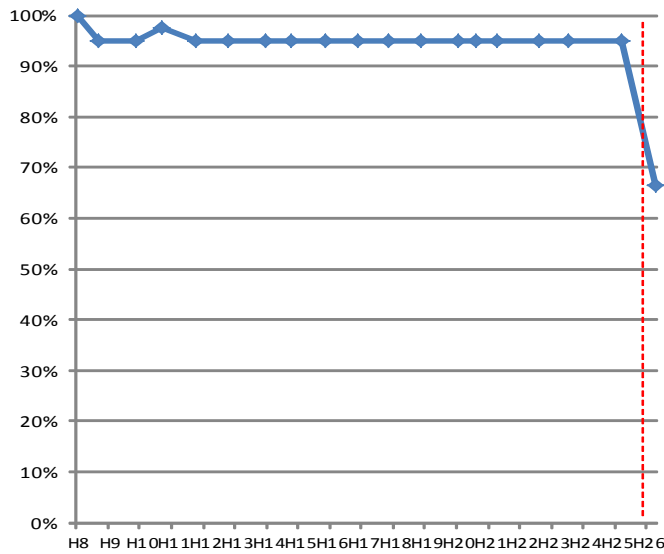
《プチ情報》

和名は藪に生える肉桂の意味でありニッケイ(肉桂)に似て、芳香はあるが、ニッケイより劣るため、つまらないものの意でヤブがついた。沖縄ではシバニッケイやマルバニッケイとの雑種らしいものが知られている。ヤブニッケイの種子からは、香油を採る。



| | | |
|-------------------|--|--|
| 樹種名 | ヤマガキ |  |
| 科目 | カキノキ科 | |
| 学名 | <i>Diospyros Kaki var. sylvestris Makino</i> | |
| 分布 | 本州（中、南部）、伊豆七島、四国、九州（対馬を含む）、国外では済州島、中国の暖帯および温帯に分布する。 | |
| 樹木特性 | 陽樹であり、山地に自生し寿命は長い。結実は実生で8年前後であるが、つぎ木では3年程度で実をつける。 | |
| 用途 | 建築・器具材として利用。未熟の果実からは柿渋がとれる。 |  |
| 植栽本数/面積 (植栽密度) | 247本/0.07ha (約3,000本/ha) | |
| 特徴 | <p>【樹形】 落葉高木で幹は直立して多くの枝に分かれ、通常樹高5~10mである。 樹皮は灰褐色で縦裂する。枝は灰褐色または灰白色である。 葉は広楕円形または倒卵形で急に尖り、全縁、下面には全体に褐色の毛が生えている。雌雄同株。葉の腋に黄緑色の短い花柄をもった花を開く。 果実は多肉の液果で球形、卵形または扁球形をなし、熟して黄赤色となる。種子は長楕円形で平たく、内に軟骨質の胚乳がある。</p> | |
| 試験地での様子 | ポット苗を植栽し、病虫獣害も特にみられず、現存率、成長状況ともに良好である。植栽から18年が経過したが、平均樹高は4m強と成長量は比較的小さい。 |  |
| 被害 | 特になし。 | |

ヤマガキ 現存率



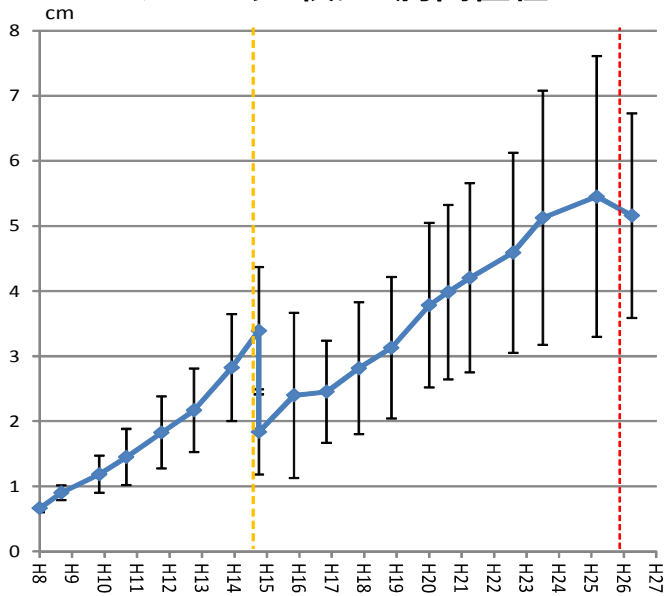
【現存率】

現存率は比較的高い。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 66.4%であった。
この他に当試験地内には樹齢が同一の自生したヤマガキが 1 本存在し樹勢は良い。
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

緩やかに成長している。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 5.16 cm であった。
この他に当試験地内には樹齢が同一の自生したヤマガキの胸高直径は 9.71 cm であり、植栽木より肥大成長が良好である。
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。
※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

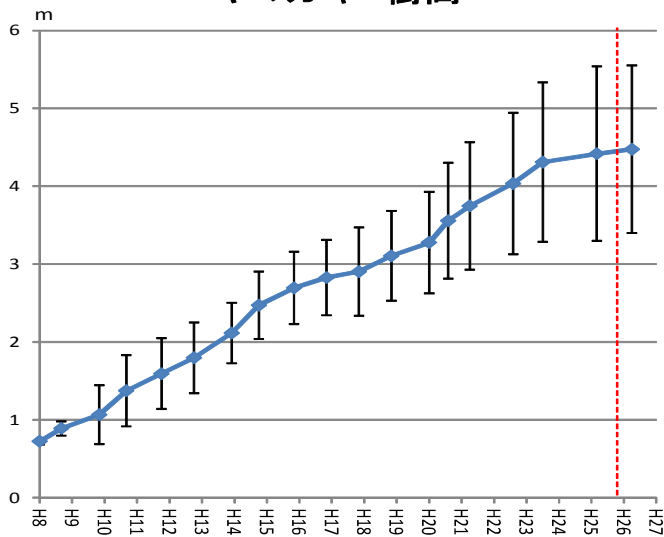
ヤマガキ 根元・胸高直径





【樹 高】

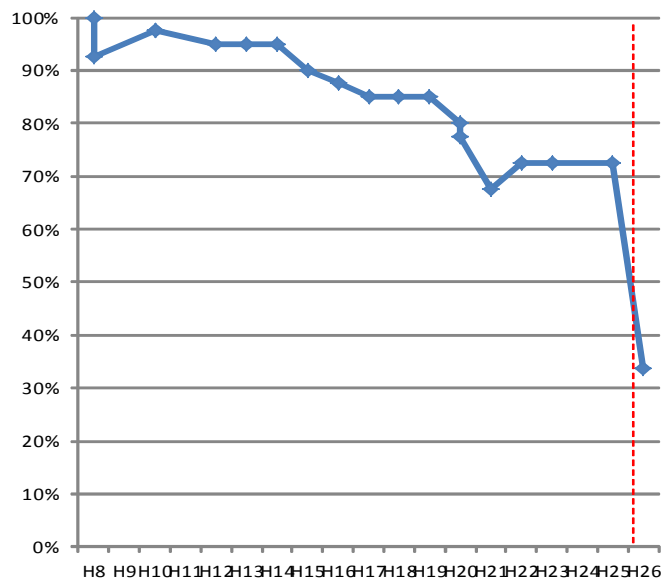
緩やかに成長している。
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 4.48m であった。
この他に当試験地内には樹齢が同一の自生したヤマガキの樹高は 6.20m であり、植栽木より上生長が良好である。
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ヤマガキ 樹高



| | | |
|-------------------|---|--|
| 樹種名 | ヤマグリ（別名：シバグリ） |  |
| 科目 | ブナ科 | |
| 学名 | <i>Castanea crenata</i> | |
| 分布 | 日本と朝鮮半島南部原産。北海道西南部から本州、四国、九州に分布。暖帯から温帯域に分布し、特に暖帯上部に多産する場合があります、これをクリ帯という。 | |
| 樹木特性 | 陽樹であり、温帯のブナ林と暖帯の照葉樹林に挟まれた中間温帯を代表する樹種で、低山地に生育する。 伐採すると切り株から萌芽する。萌芽発生本数が最大となるような切り株直径は約20 cm前後で萌芽本数は30本以上である。 | |
| 用途 | 坑木、枕木、建築、土木、家具、器具、船舶、車輛、彫刻、旋作、鍛冶用の炭、しいたけ原木など広く用いられている。 | |
| 植栽本数/面積 (植栽密度) | 270本 / 0.08ha (3500本 / ha) | |
| 特徴 | <p>【樹形】 クリのうち、各栽培品種の原種で山野に自生するものは、シバグリ（柴栗）またはヤマグリ（山栗）と呼ばれる。</p> <p>落葉高木で、高さ17m、幹の直径は80cm、あるいはそれ以上になる。樹皮は灰色で厚く、縦に深い裂け目を生じる。葉は長楕円形か長楕円状披針形、やや薄くてパリパリしている。表はつやがあり、裏はやや色が薄い。周囲には鋭く突き出した小さな鋸歯が並ぶ。雌雄同株で、いずれも5月から6月に開花する。雄花は穂状で斜めに立ち上がり、全体にクリーム色を帯びた白で、個々の花は小さいものの目を引く。また、香りが強い。非常によく昆虫が集まる。</p> |    |
| 試験地での様子 | ポット苗を植栽し、植栽後クリタマバチによる被害が一部に発生したが、早期に処理（被害枝の切り取り・焼却）したため軽微な被害で終息した。 また、植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。植栽から18年が経過した現在の平均樹高は15m程度にまで成長している。 | |
| 被害 | 植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生している。 (延べ駆除本数 コウモリガ：82本、カミキリムシ類：5本) | |

ヤマグリ 現存率



【現存率】

植栽後にコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害による枯死（12本）が発生した。

平成21年度に枯死と判定したが萌芽により復活している。

林内の照度調整を図るため平成15年、18年、21年度に本数調整伐（8本）を実施した。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、現存率は33.7%であった。

この他に当試験地内には樹齢が同一の自生したヤマグリが3本存在している。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

順調に成長している。

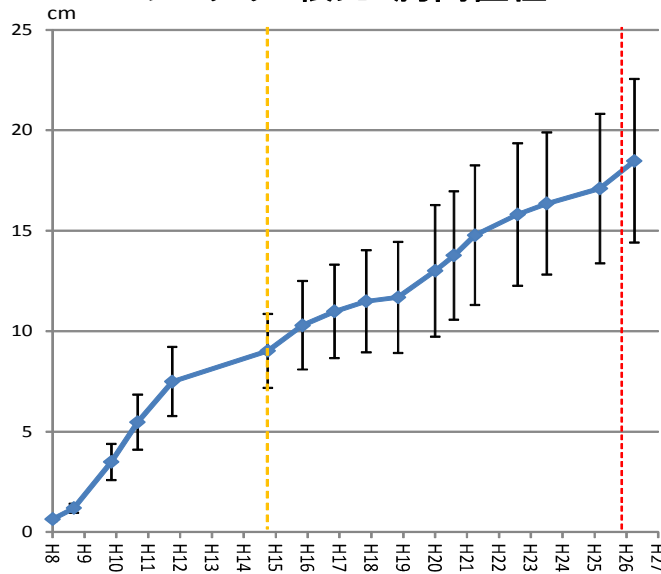
平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は18.48cmであった。

この他に当試験地内には樹齢が同一の自生したヤマグリの平均胸高直径は11.52cmであり、植栽木が肥大成長が良好である。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ヤマグリ 根元・胸高直径



【樹高】

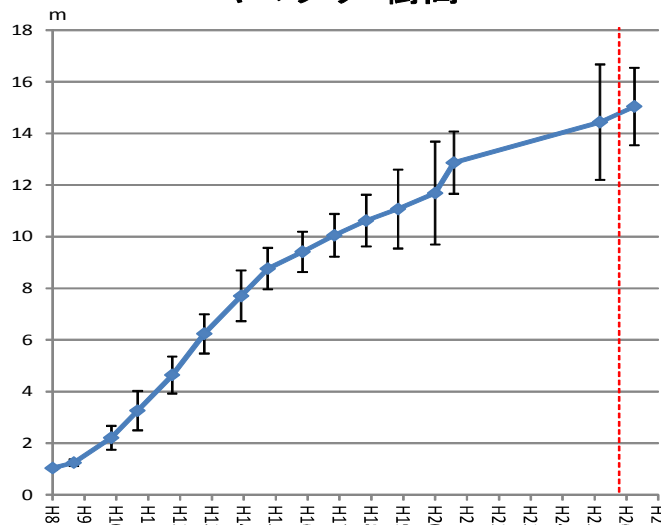
順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は15.04mであった。

この他に当試験地内には樹齢が同一の自生したヤマグリの樹高は9.24mであり、植栽木が上長生長が良好である。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ヤマグリ 樹高

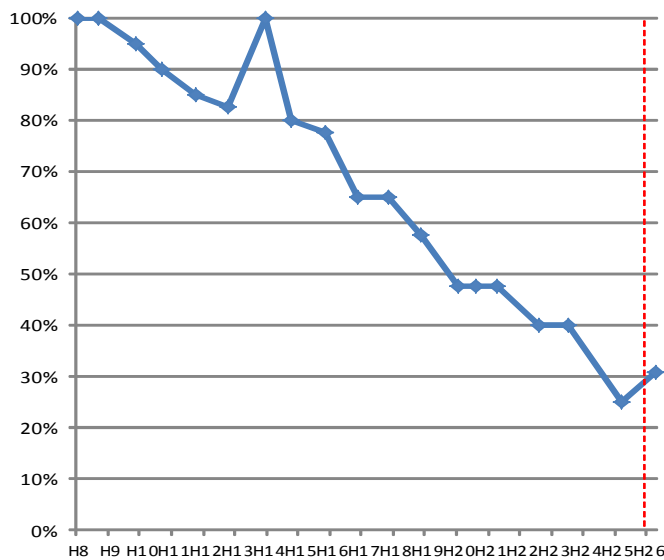


《プチ情報》

クリ材は耐湿が強く耐朽性、保存性が極めて高いことから、坑木、枕木、建築、土木、家具、器具、船舶、車輛、彫刻、旋作、鍛冶用の炭、しいたけ原木など広く用いられている。

| | | |
|-------------------|---|--|
| 樹種名 | ヤマグワ |  |
| 科目 | クワ科 | |
| 学名 | <i>Morus australis</i> | |
| 分布 | 北海道、本州、四国、九州、国外では樺太、南千島、朝鮮半島に分布する。 | |
| 樹木特性 | 陽樹であり、低山の林縁や明るい林内に生育する。 日照に対する要求度は高い。葉を養蚕用とするため広く栽培されるマグワとの交配も行われ多数の品種がある。 | |
| 用途 | 街路樹、建築・家具・器具材として利用。 | |
| 植栽本数/面積 (植栽密度) | 401本 / 0.12ha (約 3,500本 / ha) | |
| 特徴 | <p>【樹形】 クワ科の落葉高木で、山地に生え、高さ10~15mに達するが、栽培しているものは毎年刈り込むため低木状をなしている。 葉は互生、有柄で、卵形または広卵形、分裂しないものから、2~5裂するものまでさまざまである。基部から3主脈が出る。縁には大小の鋸歯がある。表面はほとんどつやがなくざらつき、裏面は脈の上に毛がある。4~5月には新枝の下部に穂状花序が垂れ、淡黄緑色の細花を密につける。雄花穂は、長さ約2cm、雌花穂はそれよりやや短い。萼片(がくへん)は4個で花弁がなく、雄花には雄しべ4本、雌花には雌しべ1本があり、花柱は先が2中裂する。果穂は、多肉質の宿存萼に包まれた瘦果(そうか)が密についたもので、6~7月、赤色から紫黒色に熟し、多汁で甘味があり食べられる。雌雄異株であるが、同株のものもあり、材は堅く狂いが少なく、美しい艶がある。</p> |    |
| 試験地での様子 | ポット苗を植栽し、植栽後にカミキリムシ類等による穿孔被害が発生し、駆除(延べ駆除本数:35本)を実施した。さらに、良質材生産を目的として一部で整枝(枝打ち)を試験的に実行したが成果は得られなかった。植栽から18年が経過するが、成長は悪く平均樹高も4m程度で成長が停止している状況である。 | |
| 被害 | 植栽後にこうやく病並びコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生したことや、シカによる剥皮害が見られる。 | |

ヤマグワ 現存率



【現存率】

植栽後にこうやく病並びに、コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生し、枯死した。さらに被害を蔓延防止するために被害が著しい樹木について駆除伐倒を実施した。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 30.7%であった。

この他に当試験地内には樹齢が同一の自生したヤマグワが 8 本存在し樹勢は良い。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

肥大成長は、ほぼ横ばいの状態である。

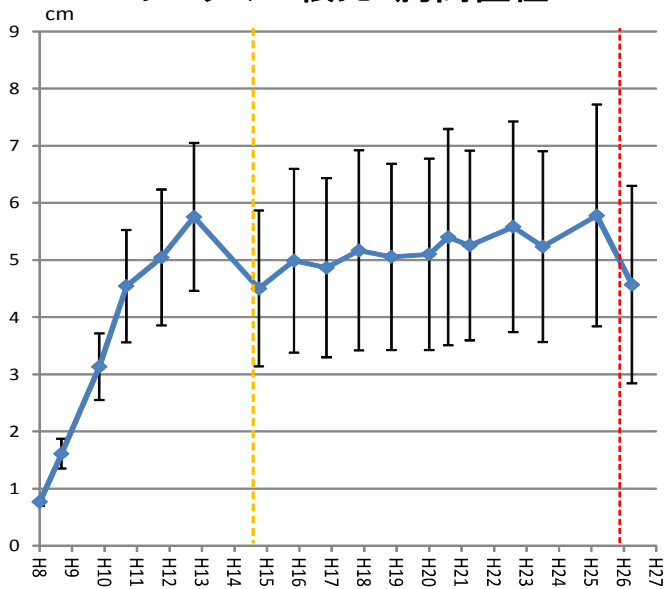
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 4.57 cmであった。

この他に当試験地内には樹齢が同一の自生したヤマグワの平均胸高直径は 13.55 cmであり、植栽木より肥大成長が良好である。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ヤマグワ 根元・胸高直径



【樹 高】

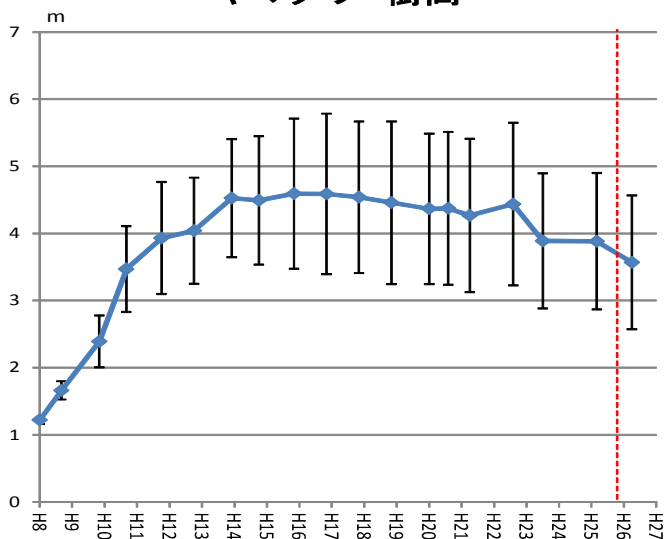
樹高成長はほぼ停止している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 3.57m であった。

この他に当試験地内には樹齢が同一の自生したヤマグワの樹高は 8.08m であり、植栽木より上長生長が良好である。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ヤマグワ 樹高



《プチ情報》

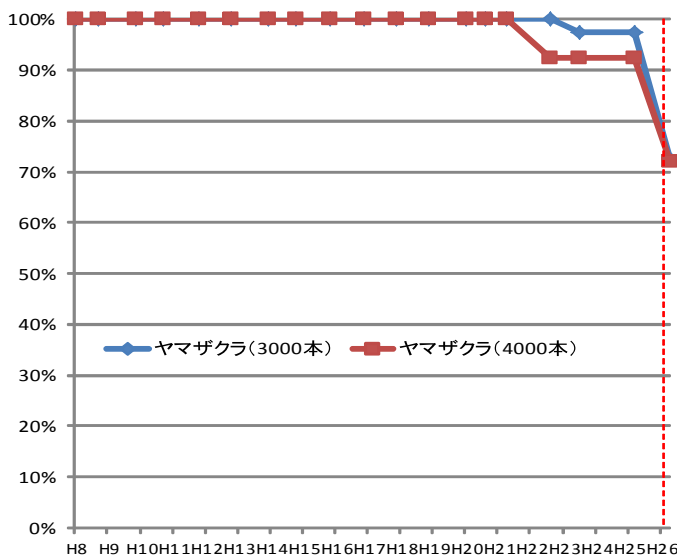
樹皮は和紙の原料となり、根皮は利尿、緩下剤に使用する。

雷が鳴ると、「クワバラ、クワバラ」と言いながら、物陰に隠れた。このクワバラは、漢字で書くと「桑原」になる。なぜ雷除けのおまじないが「桑原」なのか、日本の各地にもいろいろな説がある。

- ① 大阪府和泉市に、桑原町という地名がある。この西福寺というお寺に、「雷井戸」と呼ばれる井戸があり、奈良時代に偉いお坊さんが、雷の鳴った時に写経をしたら鳴り止んだ。
- ② 桑原は桑の畑の意味で、養蚕盛んなころに、大切な蚕が食べる桑畑には、雷が落ちないと信じられていて、「クワバラ、クワバラ」となった。
- ③ 太宰府で没した菅原道真が有名。道真は天変地異を起こす雷神として恐れられるが、道真の領地であった桑原には雷が落ちなかった。
- ④ 九州宮崎県の山里の話。「雷さんが桑の木に落ちたときに、桑の木がねばっこいものだから、雷さんの又（また）に引っかかって取れなくなった」それからは雷さんは、桑の木に落ちなくなった。諸説とても面白く、言い伝えられていて、どれも信憑性がありそうな気がする。

| | | |
|-------------------|---|---|
| 樹種名 | ヤマザクラ |  |
| 科 目 | バラ科 | |
| 学 名 | <i>Prunus Jamasakura</i> | |
| 分 布 | 本州（宮城、新潟から以南）、四国、九州、 国外では朝鮮半島南部に分布する。 | |
| 樹木特性 | 陽樹であり、丘陵から山地の伐採跡地などの二次林に生育する。暗い環境では成長はしないことから耐陰性は低い。 生育環境が良好な場合では、寿命は最大樹齢が 100 年以上と推定され、埋土種子は休眠するが、寿命は短い。 ヤマザクラは同一地域の個体群内でも個体変異が多く、開花時期、花つき、葉と花の開く時期、花の色の濃淡と新芽の色、樹の形など様々な変異がある。 | |
| 用 途 | 街路樹、建築・家具・彫刻・楽器として利用。 | |
| 植栽本数/面積 (植栽密度) | 945 本 / 0.31ha (3,000・4,000 本 / ha) | |
| 特 徴 | <p>【樹 形】 バラ科サクラ属の落葉高木であり、乾燥地でも生育するが日照に対する要求度は高い。 ヤマザクラを原種として品種改良された種も多く、葉芽と花が同時に開くので、これがソメイヨシノと区別する大きな特徴となる。 新芽から展開しかけの若い葉の色は特に変異が大きく、赤紫色、褐色、黄緑色、緑色などがあり、裏面が白色を帯びる。花弁は 5 枚で、色は一般的に白色、淡紅色だが、淡紅紫色や先端の色が濃いものなど変化も見られる。 果実は球形、直径が 9~10mm 程度、黒紫色に熟し、果肉は苦い。 樹皮は暗褐色または暗灰色。</p> |    |
| 試験地での様子 | ポット苗を植栽し、野兎・鹿による食害が多く発生した。特に、植栽後 1~2 年は野兎の被害が顕著であった。また、樹皮には食害痕から幹の腐朽が発生し、ほぼ過半数の植栽木に痕跡が見られたが枯死までには至らなかった。鹿は葉・芽を食害し、幹の径が 1cm 程度になっても噛み折っているものがあった。これらの被害が多発したため、最終的には鹿ネットを設置することとした。植栽木の成長と共にこれらの被害は減少している。 病害虫による被害は見られず、現存率、成長状況共に良好である。 | |
| 被 害 | 野兎・鹿による被害が発生した。 | |

ヤマザクラ 現存率



【現存率】

シカやウサギによる被害が発生したが、現存率は比較的高く安定している。

林内の照度調整を図るため平成 22 年度に 4,000 本/ha の方を強めに本数調整伐を実施した。

本数調整伐を実施し、その後の調査木の現存率は 84% (H 25.6 時点) である。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 72.4% であった。

当試験地では、ヤマザクラの他にソメイヨシノ (26 本)、河津ザクラ (6 本)、シダレザクラ (3 本)、八重ザクラ (7 本) が現存している。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

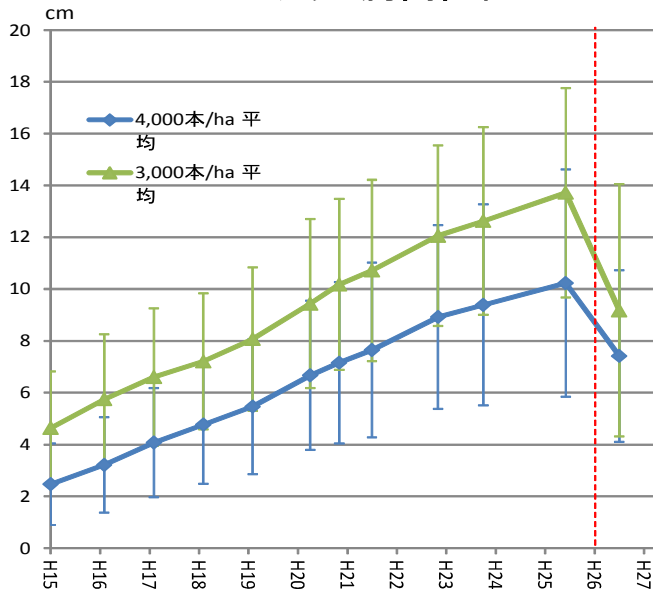
【根元・胸高直径】

3,000 本/ha の方が肥大成長が良好である。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、3,000 本/ha の平均胸高直径は 9.18 cm であり、4,000 本/ha の平均胸高直径は 7.42 cm であった。

※ 赤線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ヤマザクラ 胸高直径



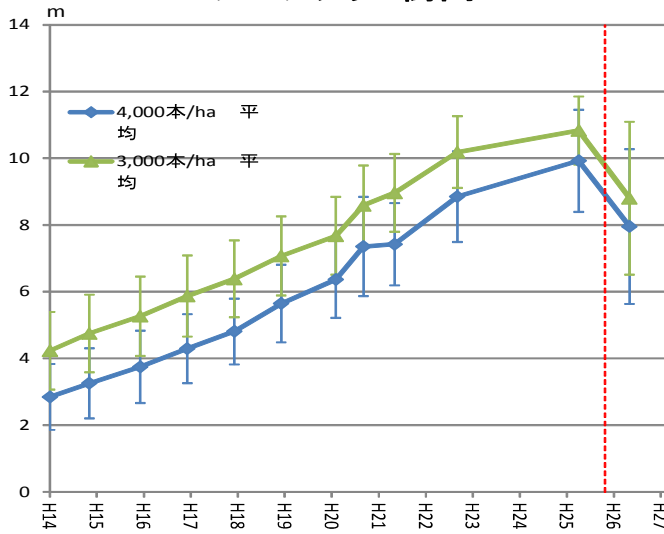
【樹 高】

3,000 本/ha の方が上長成長が良好である。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、3,000 本/ha の平均樹高は 8.80m であり、4,000 本/ha の平均樹高は 7.96m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ヤマザクラ 樹高



《プチ情報》

材はやや堅く均質で加工しやすく、表面仕上げが良好 (光沢がある) なので建築・家具材、器具・彫刻・楽器材に用いられる。樹皮は樺細工や薬用になる。

「吉野の桜」とは、本来この山桜を指すものであり、日本の象徴とされた桜でもある。長寿な種であり、樹齢 500 年を越えるものが見られる。

サクラの属名は日本では長いこと Prunus、和名ではスモモ属とする分類が主流だったが、昨今の研究では Cerasus (サクラ属) とするものがある。日本では前者、分けてもサクラ亜属 (subg. Cerasus) とするものが多かったが、近年は後者が増えてきているしかし Cerasus とすることで決着した訳ではない。

大峰山系北端の吉野山には約 3 万本のヤマザクラが植えられているとされる。一目千本と言われ、北部の山裾から南の山上へ順に、下千本、中千本、上千本、奥千本と呼ばれている。もちろんもとの自生ではなく、桜が金峰山寺蔵王権現のご神木であるとされたことによる。金峰山寺を開いた役小角 (修験道の開祖) が、桜の木に蔵王権現を彫ったことから桜が信仰の対象となり、行者たちは競って桜の苗を寄進する風習がおこった。このために平安時代から多くの桜が植えられるようになったのだそうだ。

| | | |
|-------------------|---|--|
| 樹種名 | ヤマボウシ |  |
| 科目 | ミズキ科 | |
| 学名 | <i>Benthamidia japonica</i> | |
| 分布 | 本州から九州の山地に普通に生え、国外では朝鮮半島、中国に分布する。 | |
| 樹木特性 | 本来山の谷筋などに自生する樹木で、水はけが良く常に水が存在する場所を好む。乾燥に弱く、葉の回りが枯れたり、全体が枯れるので、乾燥させないことが必要である。また、土壤改良などをして水はけのよい状態にして根が伸び易いようにしてやる必要がある。 | |
| 用途 | 街路樹・庭園樹・公園樹としても用いられる。材は器具材として用いられる。 |  |
| 植栽本数/面積 (植栽密度) | 12本/0.004ha (3,000本/ha) | |
| 特徴 | <p>【樹形】 落葉高木であり高さ 5~10m となり、幹は灰褐色ウロコ状に剥がれる。 葉は対生し、楕円形または卵円形で長さ 4~12 cm、全縁でやや波打つ。花は 6~7 月に開き、淡黄色で小さく、多数が球状に集合し、その外側に大形白色の総包片が 4 枚あり、花卉のように見える。 果実は集合果で 9 月頃に赤く熟し、直径 1~3 cm で球形、食用になる。種子は約 3 mm で、大きい果実には 3~4 個、小さい果実では 1 個入っている。果肉はやわらかく黄色からオレンジ色でありマンゴーのような甘さがある。果皮も熟したものはとても甘く、シャリシャリして砂糖粒のような食感がある。</p> | |
| 試験地での様子 | ポット苗により植栽し、12本が現存している。 |  |
| 被害 | 野兎・鹿の食害により上長成長が阻害された。 | |

【現存率】

平成 26 年に毎木調査をした結果、12 本が現存している。

【根元・胸高直径】

平成 26 年に毎木調査をした結果、平均胸高直径は 0.66 cm であり、成長スピードは遅い。

【樹 高】

平成 26 年に毎木調査をした結果、平均樹高は 2.84m であり、上長成長スピードは遅い。



《プチ情報》





庭木などにも利用されるが、花・果実・紅葉と 3 回楽しめるので、庭木にもよく用いられるが 10m 近くまでに育つ樹であるので周囲に空間を必要とする。

ヤマボウシの実は山の果実の中ではとても甘い。

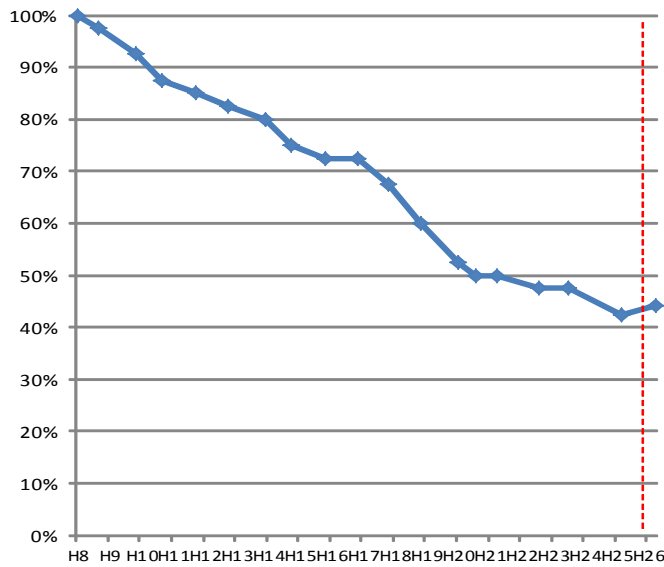
病気では特に目立ったものはないが、害虫ではアブラムシ、カイガラムシが付くことがあり、すす病（昆虫の排泄物に黒いカビが生えたもの）を誘発する。また、幹に穴を開けて食害するテッポウムシが付くことがあり、注意が必要である。

ヤマボウシを品種改良することによって、実の大きな品種（ビッグアップル）、落葉しない品種（ホンコンエンシス）、斑入りの品種（ウルフアイ）、赤みがかった花をつける品種（源平・サトミ）、黄色の花をつける品種（金陽）などの多彩な種が流通している。



| | | |
|-------------------|---|---|
| 樹種名 | ヤマモミジ |  |
| 科目 | カエデ科 | |
| 学名 | <i>A.amoenum</i> <i>var.matsumurae</i> | |
| 分布 | 山地に生え、本州（中部地方以北）から北海道にかけて分布する。 | |
| 樹木特性 | 半陰樹であり、ブナ、ミズナラなどとともに山地に生え、雪崩の多い山地でも生育できる。 秋に美しく紅葉する。 | |
| 用途 | 公園樹、建築・器具材、盆栽にも利用される。 | |
| 植栽本数/面積 (植栽密度) | 201本/0.06ha (約3,500本/ha) | |
| 特徴 | <p>【樹形】 カエデ科の落葉高木で高さ10m程度に成長する。ヤマモミジは、イロハモミジの亜種または変種とされる場合があるが、オオモミジの変種とされる場合もある。 葉は対生で、いろは楓（イロハカエデ）に似ているが、葉が大きく長さ6~10cmで中ほどまで7~9裂し、裂片は狭卵形から広披針（こうひしん形）で先が尾状にとがり、縁（へり）に不揃いの重鋸歯（じゅうきょし）または切れ込みがある。 4~5月には、新枝の先に紅色の小花が散房花序をなして垂れる。翼果は大きく、翼の長さは約2cm、裂片の先は長く尖る。</p> |    |
| 試験地での様子 | ポット苗を植栽し、植栽直後からコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生している。植栽から18年が経過した現在の平均樹高は6m程度となっており、成長量は大きくはないが緩やかに生育している。 | |
| 被害 | 植栽直後からコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生している。 (延べ駆除本数 コウモリガ：2本、カミキリムシ類：24本) | |

ヤマモミジ 現存率



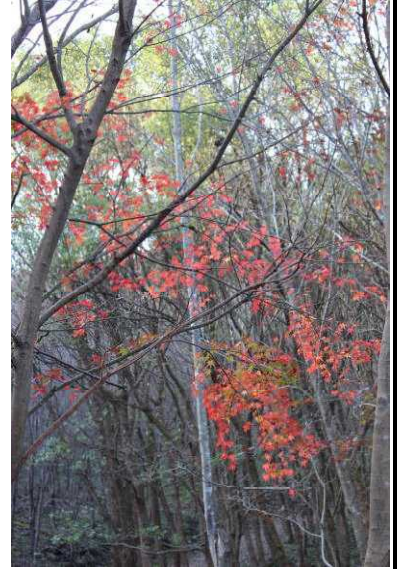
【現存率】

植栽直後からコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生し、年々生存木は減少し続けた。このことから、平成10年に補植(76本)、平成14年に補植(5本)を行った。

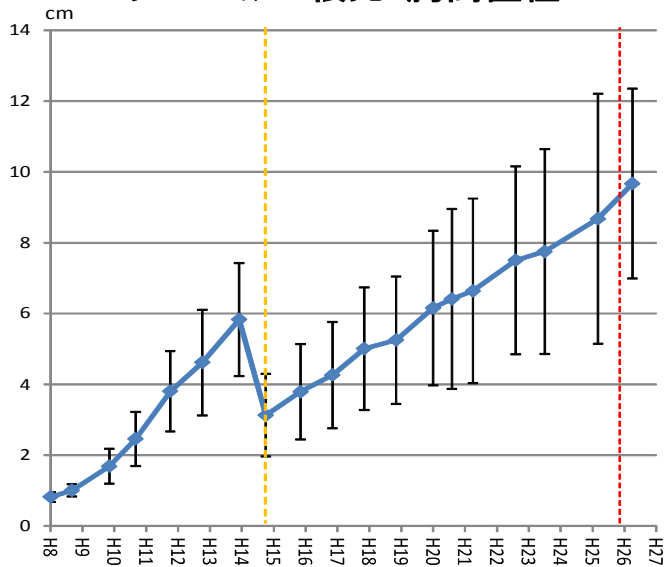
林内の照度調整を図るため平成18年度に本数調整伐を実施した。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、現存率は44.3%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



ヤマモミジ 根元・胸高直径



【根元・胸高直径】

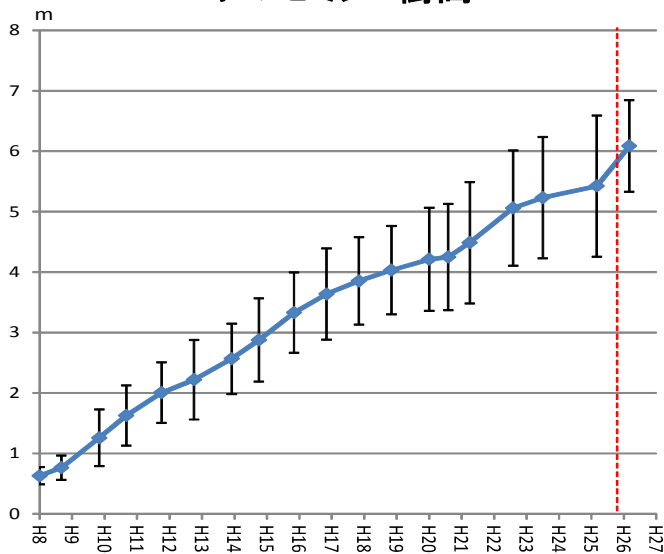
緩やかに成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は9.67cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ヤマモミジ 樹高



【樹高】

緩やかに成長している。

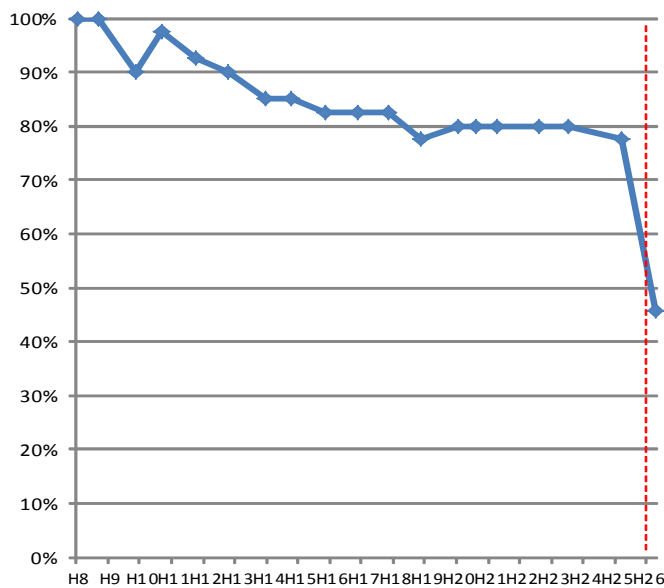
平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は6.09mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



| | | |
|-------------------|---|--|
| 樹種名 | ヤマモモ |  |
| 科 目 | ヤマモモ科 | |
| 学 名 | <i>Myrica rubra</i> | |
| 分 布 | 中国大陸や日本を原産とし、暖地に生育し、暑さには強い。日本では関東以南の低地や山地に自生する。本州南部以南では、海岸や低山の乾燥した尾根など、痩せ地で森林を構成する重要樹種である。 | |
| 樹木特性 | 半陰樹であり、低地や山地のやや乾燥した土地に生育する。根粒に窒素固定を行う放線菌の1種であるフランキア (<i>Frankia</i>)を共生させており、やせ地に耐え、比較的耐陰性もあるが、粘土質土壌・排水の悪い湿地では生育不良である。 | |
| 用 途 | 潮害・病虫害に強いいため街路樹、公園樹として利用。実は食用となる。 | |
| 植栽本数/面積 (植栽密度) | 278 本 / 0.06ha (5,000 本 / ha) | |
| 特 徴 | <p>【樹形】 常緑高木で樹高は 10~15m になり、幹は太くなると灰白色の樹皮に覆われ、多数の楕円形の皮目を持つ。古くなると縦の裂け目がでることが多い。葉は滑らかな縁(全縁)だが、若木では不規則な鋸歯が出る。葉柄は 5~10mm 程度と短い。枝分かれが激しく株立ちのような樹形になる。風圧を受けやすい樹形で根曲木が多い。雌雄異株で、花期は 3 月から 4 月、数珠つなぎに小さな桃色の花弁四枚の目立たない花をつける。6 月ごろに黒赤色の実を結ぶ。果実はほぼ球形で暗赤色、表面に粒状突起を密生する。材は櫛・ポタンなどの器具材、薪炭材、樹皮からはタンニンを抽出し大島紬や漁網の染料として利用されたが現在では減少している。現在では、街路樹として公園や街路にも植えられる。殖やし方は接木のほか取り木がある。</p> |    |
| 試験地での様子 | ポット苗を植栽し、植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生している。 | |
| 被 害 | 植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生している。 (延べ駆除本数：16 本) | |

ヤマモモ 現存率



【現存率】

植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生したことから、平成 10 年に補植 (30 本) を行った。

その後、病虫害対策を実施し続け、平成 19 年度からは順調に生育している。

林内の照度調整を図るため平成 24 年度に本数調整伐を実施した。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 45.7%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

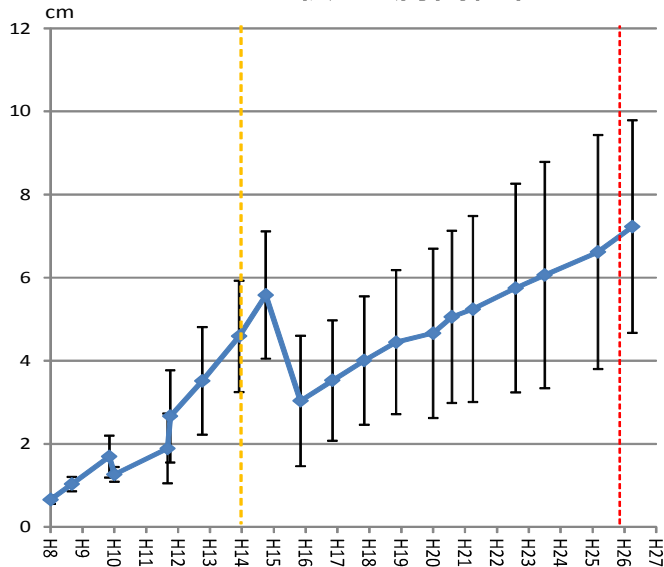
緩やかに成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 7.23 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ヤマモモ 根元・胸高直径



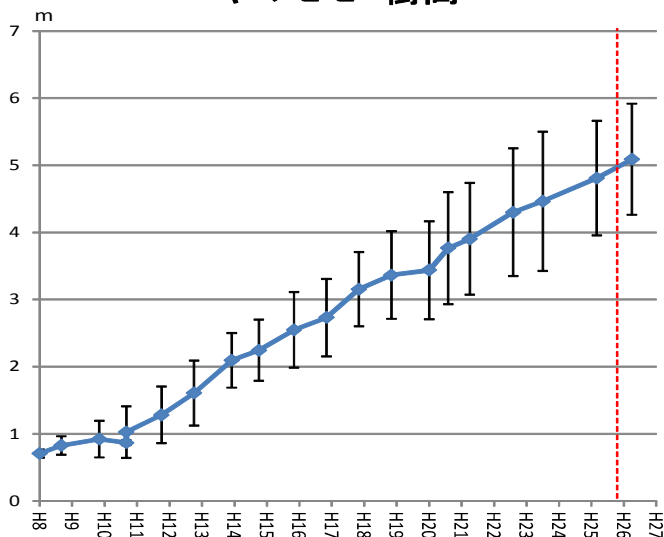
【樹 高】

緩やかに成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 5.09mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ヤマモモ 樹高



《プチ情報》

和名の由来は山に生えモモの様な果実をつけることから。別名として楊梅 (ようばい)、山桜桃、火実などがあり、古代から和歌などにも詠まれる。

古くは、漁村において、魚の漁獲を保証するために周辺の山に人工林を作っていたとの伝承があり、ヤマモモがよく利用されたという。ヤマモモの実は、鳥などに食べられ、消化された後に発芽する性質がある。そのため、発芽率を上げるには、種子を便所の壺につけておいたとも言われる。

名前にモモがつくがモモはバラ科であり、ヤマモモとモモは全くの別植物である。

樹皮は楊梅皮 (ようばいひ) という生薬で、タンニンに富むので止瀉作用がある。消炎作用もある。

るので筋肉痛や腰痛用の膏薬に配合されることもある。中国から桃が入ってくる前は本種を桃と呼んでいた。果実は甘酸っぱく、生で食べる他、ジャムや果実酒に加工される。